第二部　名古屋大学の歴代総長・学長

初代総長（名古屋帝国大学）

渋沢　元治（しぶさわ　もとじ、任一九三九～四六）

名古屋（帝国）大学初代総長の渋沢元治（一八七六―一九七五）は、一八七六（明治九）年、埼玉県榛沢郡血洗島村（現在の深谷市）に、郡でも指折りの豪農、渋沢家の長男として生まれました。近代日本を代表する企業家である渋沢栄一は、その伯父にあたります。

渋沢は、東京府立尋常中学校を卒業後、一八九四年に第一高等学校に入学しました。そして九七年には、東京帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）に進みます。当時は新しい分野であった電気工学を学びますが、在学中から独自の理論が学会に注目されました。卒業後、伯父栄一のすすめで四年近く欧米へ留学し、一九〇六年に逓信省へ入りました。以後、技術官僚として活躍し、日本の電気行政の確立に大きな足跡を残しました。

その一方で渋沢は、日本を代表する電気工学者でもありました。当時きわめて希少であった工学博士号を

持ち、東京帝国大学教授も兼務、一九二三（大正一二）年には日本電気学会会長となります。そして二四年には逓信省の技術課長を辞し、東京帝国大学の専任教授に就任しました。二九（昭和四）年には工学部長となり、さらに同年、世界の電気工学者にとって最高の栄誉であった、アメリカ電気学会名誉会員に選ばれました。三七年に定年退官したのち、三九年、新設された名古屋帝国大学総長に任命されたわけです。

しかし、創立当時の名古屋帝国大学（名帝大）は、鶴舞の名古屋医科大学があった医学部はよいとしても、理工学部についてはまだ名前だけで、地元から寄付された東山キャンパスには何もなく、これから施設を整備し、教官を集めるというのが実状でした。渋沢総長は、これまでのキャリアによって培った声望や人脈などを駆使し、苦労のすえ創立後一年で何とか理工学部の発足にこぎつけたのです。

とはいえ、戦争はますます激しくなり、大学をとりまく環境は悪くなる一方でした。渋沢総長は、聖徳太子の一七条憲法の一節「以和為貴（和をもって貴しとなす）」の書を総長室の額として掲げ、これを大学全体の座右の銘として困難に立ち向かいました。総長と学生が鍋や弁当を食べながら懇親をはかる「総長懇談会」も、その一環といえるでしょう。そして一九四二年に理学部の分離独立が実現させ、さらに名古屋市おける航空機産業の隆盛を背景に、医学部の講座から実績を積み上げ、四三年に航空医学研究所を附置しました（渋沢総長が所長を兼任）。研究

資金の不足も深刻でしたが、愛知県科学技術振興会の資金など、地域からの援助によって何とか補いました。こうして、総合大学としての体裁がまがりなりも整い、工学部の第一回卒業生を出した直後の四三年五月一日、医学部学友会の寄付を得て開学式が挙行されたのです。もっとも、資金と物資の不足で東山の施設はまだ貧弱であり、農学部や文系学部の設置も大きな課題として残されていました。しかし戦局が悪化するなか、それらの解決は困難でした。

敗戦後も、渋沢総長の苦闘は続きました。空襲で焼失した校舎の復興予算を獲得することに奔走するとともに、ＧＨＱ（連合国軍最高司令官総司令部）の指示で航空に関係する教育研究が禁止されたことをうけ、航空医学研究所を環境医学研究所に改組する案で政府と交渉し、これを存続させることに成功しました。しかし、そうしたなかで体調をくずし、老齢もあって、一九四六年一月に退任せざるをえませんでした。

退任後の渋沢は、故郷の埼玉県にもどりました。健康を回復したのち、学会などさまざまな活動に復帰しました。とりわけ精力的な文筆活動が目につきます。そして一九五五年、電気関係者として初めての文化功労者に選ばれました。これを記念して、日本電気協会による「澁澤賞」がもうけられ、現在でも電気保安事業に功績のあった人々を表彰し続けています。

名古屋大学大学文書資料室では、こうした渋沢初代総長の生涯を物語る個人資料約一千点を所蔵し、一般に公開しています。

第二代総長（名古屋帝国大学　旧制名古屋大学）

田村　春吉（たむら　はるきち、任一九四六～四九）

名古屋帝国大学（四七年一〇月から名古屋大学（旧制）に改称）第二代総長田村春吉の経歴などについては、第一部をご覧ください。

さて、一九三九（昭和一四）年、愛知県からの莫大な寄付金によって名帝大が創立されると、功労者の田村を総長にとの声もあったようですが、医学部長として渋沢総長を支えることになりました。田村医学部長は、農学部や文系学部の設置とともに、東山のキャンパス計画にも熱心に取り組みました。自ら自動車に乗って敷地を踏査するとともに、東山一帯の千分の一スケールの大きな模型を作らせ、これを見ながら計画を練りました。このいわゆる「田村模型」は、戦後しばらく行方不明になっていたものが、最近になって豊田講堂の倉庫から発見され、大学文書資料室が保存措置を施したうえ、名古屋大学博物館に展示されています。

そして敗戦後の一九四六年一月、田村は総長に就任しますが、当時の名帝大はまさに前途多難でした。まず、空襲によって焼失した鶴舞キャンパス（医学部）や西二葉キャンパス（工学部）の復興や代替施設の確保を早急におこなう必要がありました。また、戦災にあわなかった校舎も、戦時中に建設された粗末なものだったため、これも建て替えていかなければなりません。さらに、名実ともに総合大学となるためには、文学部、教育学部、法学部、経済学部、農学部の新設が不可欠でした。そして、新制大学に移行するための準備があります。そのためには、第八高等学校や名古屋高等商業学校、岡崎高等師範学校などを包括する必要もありました。一つ一つですら大きな仕事を、ほとんど同時に進行させなければならなかったのです。

もちろん、こうした復興と総合大学の実現に必要となる資金や施設については、地元の政財界が田村総長の呼びかけに応じて「名古屋帝国大学復興後援会」を結成し、支援を惜しまなかったことを忘れてはなりません。ただ、難事の多くをなしとげ、あるいは進展させた田村総長の手腕も高く評価されるべきだと思います。とくに名古屋大学が総合大学としての内実を整えたことは、田村総長が長年の本懐をとげたものといえるでしょう。

しかし田村総長は、新制名古屋大学の出発を見ることができませんでした。新制施行まで一ヵ月を切った一九四九年五月、急な病に倒れ、まもなく亡くなったのです。逝去に先立って、勲一等瑞宝章が贈られました。

第三代学長（新制名古屋大学）

勝沼　精蔵（かつぬま　せいぞう、任一九四九～五九）

第三代学長の勝沼精蔵（一八八六―一九六三）は、一八八六（明治一九）年、兵庫県神戸区（現在の神戸市）に生まれました。日本郵船会社の船長だった父が海難事故で若くして亡くなると、母の郷里で苦学して県立静岡中学校を卒業、一九〇四年に第一高等学校に入学しました。東京帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）に進学し、一一年に卒業、大学に残って内科学や病理学の研究を続けました。また、一九（大正八）年におこなわれた、第一次世界大戦のパリ講和会議には、首席全権の西園寺公望（元首相、元老）付きの医師として随伴した三浦謹之助の助手として同行しました。三浦は、勝沼の大学時代の指導教官です。これをきっかけに、勝沼は西園寺の担当医となり、それは四〇年に西園寺が死去するまで続きました。

そして、一九一九年にパリから帰国した直後、愛知県立医学専門学校教授として名古屋市に赴任しました。

二三年には愛知医科大学教授（内科学）に就任します。勝沼といえば、一般に血液学の泰斗として知られていますが、ドイツ留学から帰国後の二六年、「オキシダーゼの組織学的研究」で帝国学士院賞（現在の日本学士院賞）を受賞しました。オキシダーゼとは、生体内の酸化酵素のことです。名大創基一三八年の歴史において、日本（帝国）学士院賞の受賞者は二九名を数えますが、勝沼がその最初の受賞者となりました。戦後の一九五四（昭和二九）年には、これも名大史上初の文化功労者に選ばれ、文化勲章も授章しています。

一九三一（昭和六）年、官立移管の名古屋医科大学でも教授となり、三九年創立の名古屋帝国大学でも、附属病院長として田村春吉医学部長を支えました。そして四七年七月、新制名古屋大学において、田村総長の急逝後の業務を代行していた生源寺順（しょうげんじかず）学長事務取扱の後をうけ、第三代学長に就任しました。以下、一〇年と大変長い勝沼学長時代（次の松坂学長以降は、六年が任期の上限とされました）の事績を、かいつまんで紹介していきます。

勝沼学長の最も大きな課題は、田村総長の事業を引き継ぎ、名古屋大学を新制の総合大学として完成させることであったといえます。学部の整備としては、一九五〇年に法経学部を分離して法学部と経済学部を独立させ、五一年には農学部を発足させました。とくに、田村総長が果たせなかった農学部の新設は、勝沼学長のはたらきかけもあり、かねてより設置に意欲を見せていた地元の政財界が「名古屋大学農学部創設後援会」を結成し、巨額の寄付金と安城町

（現在の安城市）による施設の提供によって実現しました。これで一通りの学部がそろったことになります。また五三年および五五年には、新制大学院が設置されています。

ただ学部はそろったものの、各地に分散する「たこ足大学」の状態でした。通信手段が発達していなかった当時、各学部が同じキャンパスに集まることは、総合大学にとって現在よりも重要だったものと思われます。これが比較的早く実現していった背景には、名大が全国でも初めての「建築交換方式」（大学の施設や敷地の取得を希望する企業や自治体に、その代価として東山キャンパスに校舎を建設してもらう方式）をとったことがあります。この方式は、勝沼学長の指揮の下、事務局の大変な尽力によって実現したものです。五五年に工学部（民間企業との交換）が、五九年に経済学部と法学部（名古屋市との交換）が東山に集結し、その後、文学部、教育学部、大学本部、教養部も集まりますが、いずれも名古屋市との建築交換です。

そして、現在も名大のシンボルであり続けている豊田講堂の建設も、勝沼学長時代の大きな事績として挙げるべきでしょう。すでに名帝大時代から、東山への講堂の建設は大きな課題とされ、多額の寄付金が集められていましたが、戦後のインフレや学部の設置などによって使い果たされていました。勝沼学長がトヨタ自動車工業株式会社（現在のトヨタ自動車株式会社）に重ねて足を運んで依頼した結果、依頼した倍の金額の寄付の申し出があり、念願の講堂が建設されることになりました。現在、豊田講堂のロビーには、勝沼学長の胸像が置かれています。

第四代学長

松坂　佐一（まつさか　さいち、任一九五九〜六三）

第四代学長の松坂佐一（一八九八―二〇〇〇）は、一八九八（明治三一）年、岡山県都窪郡茶屋町（現在の倉敷市）に生まれました。愛知県豊橋市の八町尋常小学校を卒業後上京し、東京府立第一中学校から第一高等学校へ進みました。一九二三（大正一二）年に東京帝国大学法学部独逸法律学科を卒業し、株式会社第一銀行（第一国立銀行の後身）に就職しますが、二七（昭和二）年に京城帝国大学法文学部助教授に転じました。三〇年には教授となります。京城とは現在の韓国ソウルですが、当時の朝鮮半島は日本の朝鮮総督府による統治下にありました。

敗戦により本土に引き揚げたのちの一九四六年、敗戦前は中国上海にあった東亜同文書院大学を引き継いで設立されたばかりの愛知大学から、教授として迎えられました。そして、四八年に設置された名古屋大学新学部創設委員会の外部委員として、同年の法経学部（のち五〇

年に法学部、経済学部に分離）の創設に深く関わり、その最初の教官（非常勤）となりました。

そして翌年、正式に名古屋大学法経学部教授に就任します。当時の法学部は、名城キャンパス（名古屋城二の丸内）にありました。松坂の専門は民法で、ローマ法やドイツ・フランス法の条文・学説・判例の緻密な分析による研究に定評がありました。その後、附属図書館長、法学部長、教養部長などを歴任し、五九年に学長となりました。名古屋大学創立七〇年のなかで、唯一の文系学部出身の学長です。弁護士の資格を持ち、民間企業での勤務経験がある経歴にも特徴があります。

在任の四年間における事績は、プラズマ研究所の附置（六一年）、医学部附属病院分院の第一次移転（六一年）、東山への学生会館の開設（六二年）、文学部の名城キャンパスから東山への移転（六三年）など多くありますが、ここでは就任当初の約一年間に注目してみましょう。

松坂学長が一九五九年七月に就任した時、日米安全保障条約の改定に反対する運動、いわゆる安保闘争が学内でもはじまっていました。そうしたなか、八月に伊勢湾台風が襲来し、教職員・学生の多くが被災するとともに、名大の施設も甚大な被害をこうむり、学部ごとに講義の休講や試験の延期などの措置もとられました。多くの名大生が、被災した学生や住民の救援活動に積極的に参加しましたが、その過程で政治や社会の問題に自覚的に目を向けるようになったとされます。そして六〇年一月に新安保条約が調印され、さらに同年五月にその批准案などが国会で強行採決されると、闘争はいよいよ激化し、名大でも多くの学生や職員が安保反対や

民主主義擁護の運動に関わりました。

このような状況を背景として、六〇年の初夏に、名大にとって二つの大きな出来事がありました。一つは、五月に式典が挙行された豊田講堂の竣工です。この豊田講堂の建設も、伊勢湾台風によって工事が遅れ、建築費も予定より高くなるという影響をうけました。二〇〇八（平成二〇）年に改修竣工が成った豊田講堂は、現在でも重要な行事や式典がおこなわれると同時に、名大のシンボルであり続けています。

もう一つは、六月に第一回名大祭がおこなわれたことです。これは、東山への学部の集結が進みつつあった地理的条件の下、安保闘争や伊勢湾台風被災者の救援活動などによって高揚した、学生運動のエネルギーが結集されたものといえるでしょう。名大祭は、二〇〇九年で五〇回を迎えようとしています。当時とは、担い手である学生の性格に相当な違いはありますが、学部を超えた学生の統一と、学生のエネルギーの発露を象徴する行事であることは変わっていないと思います。このように、松坂学長の就任後一年間は、日本だけでなく名大史にとっても大きな画期の一つといえるでしょう。

退任後の松坂学長ですが、弁護士を開業するとともに、ＮＨＫ経営委員（六七年に経営委員長）、名古屋証券取引所公益理事などとしても活躍し、二〇〇〇年に一〇一歳で亡くなりました。名大の総長・学長としては、渋沢初代総長の満九八歳をしのぐ長寿でした。

第五代学長

篠原　卯吉（しのはら　うきち、任一九六三～六九）

第五代学長の篠原卯吉（一九〇三―一九九三）は、一九〇三（明治三六）年、現在の愛知県名古屋市で生まれました。愛知県立第一中学校（現在の県立旭丘高等学校）を卒業して第八高等学校に進学、一九二三（大正一二）年に卒業し、九州帝国大学工学部に入学しました。二六年、電気工学科を卒業すると同時に講師に任じられ、まもなく北海道帝国大学へ転任、助教授となりました。そして一九四〇（昭和一五）年、その創設と同時に名古屋帝国大学理工学部教授（四二年の理・工分離以後は工学部教授）に就任したのです。同じ電気工学者である渋沢元治総長に見込まれてのことでしょう。専門は高電圧工学で、日本の第一人者と目され、とくに高周波加熱に関する分野を切り開いて、やがてその技術はミシン・楽器などに広く用いられました。しかし、戦局が悪化し、空襲の危険が迫ってくると、工学部や理学部は疎開をよぎなくされました。篠原研究室も、岐阜県高山市や名古屋市内に疎開しています。

敗戦後、工学部の復興は困難をともないました。名古屋市東区西二葉町（現在の白壁二丁目、県立明和高等学校付近）の仮校舎が空襲で焼失したため、その代替施設が必要でしたし、戦争で頓挫していた東山キャンパスの工学部校舎の建設も進めなければなりません。篠原は、工学部長の指示をうけ、代替施設の確保に奔走しました。そして、一九五三年に工学部長となった篠原に残されていた大きな課題は、高蔵キャンパス（現在の名古屋市熱田区六野）の東山移転でしたが、これは建築交換方式（第三代勝沼学長の項を参照）によって、五六年に実現しました。その後、教養部長をへて、六三年七月に学長となります。

篠原学長時代の大きな事績は、やはり名古屋大学が「たこ足大学」から脱却したことでしょう。すでに理・工・経済・法・文学部が東山に集結していましたが、一九六三年に教育学部、六四年に大学本部・教養部、そして六六年には農学部が移転を果たしました。そのほか、日本ヘラルド映画株式会社会長の古川為三郎・志ま夫妻の寄付を得て、六四年に古川図書館（現在の名古屋大学博物館および年代測定総合研究センター）が落成したことも特筆されます。

しかし、任期も終わりに近づいた頃、名大も大学紛争の時代に突入します。六八年にいわゆる医学部紛争が起こり、大きな社会問題として全国から注目され、六九年には東山でも大学紛争の嵐が吹き荒れます。篠原学長はこれへの対応に苦慮し、健康も悪化したため、任期満了を目前にした五月に辞任しました。七三年に勲一等瑞宝章をうけています。

第六代学長

芦田　淳（あしだ　きよし、任一九六九～七五）

第六代学長の芦田淳（一九一四―二〇〇一）は、一九一四（大正三）年、現在の兵庫県芦屋市に生まれました。一九三八（昭和一三）年に東京帝国大学農学部農芸化学科を卒業、大学院で研究を続け、アジア・太平洋戦争ただなかの四四年に大阪帝国大学産業科学研究所講師、敗戦後まもなく助教授となりました。五三年、名古屋大学農学部農芸化学科教授に就任します。

名古屋大学農学部は、一九五一年に設置されたばかりで、しかも安城市にあり、当初は施設面もきわめて不十分でした。それでも芦田は、栄養化学講座の教授として、研究と教育に熱心に取り組みました。研究業績で特筆すべきは、世界に先駆けて栄養学に生化学的方法を導入したことです。六三年に日本栄養・食糧学会武田賞、六四年には日本農学賞と読売農学賞を受賞しています。著書『栄養化学概論』（一九五三年初版）は、不朽の名著として、現在でも栄養学

を学ぶ者に読み継がれています。また、六四年から六八年まで農学部長を務めました。

そして、一九六九年五月に学長事務取扱に任命されます。これは、前項でもふれたように、大学紛争で学内が騒然とするなか、篠原卯吉学長が任期をわずかに残して辞任したことによる措置でした。そして七月、正式に学長に就任します。この六九年は、東山キャンパスにも紛争が波及し、五月には本部と教養部が学生によって封鎖される事態となりました。芦田学長は、学生の退去を求めつつも、話し合いには応じる意向を示し、粘り強く紛争の解決に努力しました。また大学自治を守るため、国会での「大学運営に関する臨時措置法案」の強行採決に抗議する声明を発表しています。しかし紛争は沈静化せず、九月には学生が芦田学長を豊田講堂に「軟禁」し、事態の説明を強要しようとする事件が発生しました。この時、学長は不適切な方法を批判し、説明を拒否しますが、紛争はこの年の一二月まで続き、最後は学校側による学生の実力排除、その後の警察の立ち入り捜査という形で終結したのでした。

そして芦田学長は、動揺した大学を立て直すため、紛争の終結前から大学改革に関する提案を積極的に発表し、学長直属の非公式機関として改革試案検討委員会を発足させました。また、一九七二年には、「研究と教育に関する大学問題検討委員会」を設置し、同委員会は二度の答申を提出するなど、その後の大学改革へつながっていきました。

退官後、椙山女学園大学教授となり、一九八三年に同大学学長に就任、八六年には勲一等瑞宝章を受けています。

第七代学長

石塚　直隆（いしづか　なおたか、任一九七五～八一）

第七代学長の石塚直隆（一九一二―一九九三）は、一九一二（大正元）年、アメリカのサンフランシスコで生まれました。石塚の父は、義務教育を終えてすぐにアメリカに渡った移民でしたが、息子には最高の教育を受けさせたいと、生後半年の石塚を、神奈川県足柄下郡国府津村（現在の小田原市）の長兄に預け、養育を依頼しました。石塚は、東京府立第七中学校から官立東京高等学校へ進み、一九三四（昭和九）年に大阪帝国大学医学部へ入学しました。卒業後まもなく、日本と戦争をしていた中国（上海）の病院に赴任しますが、その翌年の四一年に日本とアメリカが開戦します。石塚にとって、実の両親が住んでおり、自身も国籍を持っていたアメリカと日本が戦争をはじめたことは、大変つらいことでした。そして四三年に上海で召集され、第一線の戦場に軍医として従軍しました。

敗戦後、大阪大学医学部産婦人科教室にもどり、助手から助教授となりました。研究分野は、黄体ホルモンの生体内代謝、絨毛上皮腫の化学療法についてでした。そして一九五九年に奈良県立医科大学教授となったのち、六一年に名古屋大学医学部教授に就任しました。以後、旺盛な研究活動を続け、六六年には日本産科婦人科学会会長に就任、七二年には中日文化賞を受賞しています。石塚は、さらに医学を究めることを望みましたが、時あたかも名大学にも大学紛争の波が押し寄せ、いわゆる医学部紛争となりました。とりわけ六七年に当時の社会問題にもなった教授選考問題が発生すると、石塚は心ならずもいわゆる五人委員会の一人に選ばれ、これに真摯に取り組んだ結果、研究時間がほとんどなくなったと回想しています。そして七二年には医学部長となりました。これも不本意であったようですが、石塚医学部長は学部の信頼回復のため全力を尽くしました。そして七五年七月、学長に就任しました。

六年間にわたる石塚学長時代の事績を見ると、施設面においては、名古屋市東区東門前町二丁目（現在の東桜二丁目）にあった医学部附属病院分院が、名古屋市東区大幸一丁目（現在の南一丁目）に移転したことが特筆されます。現在ここには、医学部保健学科と大幸医療センターが置かれています。また八一年の任期満了直前には、現在の中央図書館が完成しました。組織面では、七七年の名古屋大学医療技術短期大学部の併設がありますが、石塚学長が最も時間とエネルギーを注いだのは、何と言っても教養部改革でした。

教養部改革は、すでに前任の芦田学長時代に先鞭がつけられ、とりわけ一九七〇年の大学設置基準の改正をうけて検討が進みました。七二年に教養部大学問題検討委員会が設置され、七四年には同委員会の答申などに基づいて、学長の直属機関として四年一貫教育検討委員会が設けられました。この委員会は、石塚学長が就任してのちも審議を続け、七七年に答申が提出されました。この答申は、のち八四年のいわゆる五九年度カリキュラムとして結実します。また、石塚学長が最も苦労したのが、教養部改革を政府への概算要求としてまとめる作業で、一次案を作成するまでに就任してから丸三年をかけ、二次案に至るまでさらに二年を要しました。こうした学内における議論が、一九九三（平成五）の教養部廃止、二〇〇一年の教養教育院設置（学内措置）などをへた、現在の全学教育システムに礎になっているともいえます。

石塚学長は、一九八一年七月に任期満了で職を退きました。退任の辞では、大変恵まれた六年間であったとしたうえで、新設した医療技術短期大学部は四年制をめざすべきであること、念願の歯学部設置が実現しなかったことが残念でならない、とも述べています。その後、大阪府立母子保健総合医療センター総長を八四年まで務めました。八五年には勲一等瑞宝章を受章しています。

第八代学長

飯島　宗一（いいじま　そういち、任一九八一～八七）

第八代学長の飯島宗一（一九二二―二〇〇四）は、一九二二（大正一一）年、現在の長野県岡谷市に生まれました。一九四二（昭和一七）年に松本高等学校を卒業し、名古屋帝国大学医学部に入学、四年間の大学生生活のうちの三年間を戦時体制のただなかにすごしました。病理学を専攻しましたが、四五年三月の空襲によって校舎が焼失し、敗戦後は知多郡大府町の国立愛知療養所の仮校舎で勉強しました。その後、名古屋大学医学部病理学教室で研究を続け、五二年に講師、ドイツ留学をへて五八年に助教授となりますが、六一年には広島大学医学部教授に転じます。

広島大学に赴任した飯島は、広島の原爆被害者の実態を病理学者として目の当たりにして、いわゆる原爆症の問題が、いかに人類にとって重大であるかを実地に認識します。そして、日本で初めて原爆症の病理学的研究に本格的に取り組み、世界に名前を知られるよ

うになりました。このこともあって、広島は原爆症研究の盛んな地としても定着しました。また飯島は、核兵器の悲惨さを率先してうったえ、核廃絶運動や平和運動にも生涯をかけて関わるようになり、大きな成果を上げました。これをテーマとする著書も多数あります。広大では、六九年に四七歳の若さで学長に就任し、二期八年にわたって大学紛争や学内改革、キャンパスの統合移転などの問題に取り組みました。

そして、学長退任後まもなく名古屋大学にもどり、その二年後に医学部長、さらにその翌一九八一年に学長に就任しました。他大学での学長経験者の学長就任は、前身大学の学長を経験した第二代の田村春吉総長を別にすれば、名大創立七〇年の歴史の中で例がありません。また、創立以来初めての、母校を卒業した生え抜き学長の誕生となりました。

飯島新学長は、『名古屋大学学報』に「学長就任にあたって」と題する短い文章を寄せました。そこには、名古屋大学が戦時下における厳しいスタートだったにもかかわらず、「学問振興のエネルギーと、学の総合への情熱がみなぎって」おり、敗戦直後は、建物もお金も、食べ物すらない時代であったものの、キャンパスには希望があふれており、自分の学生時代の青春の記憶と重ね合わせて「自由で活(ママ)達な名古屋大学の建学の気風」を想起する、との感慨が述べられています。建学当初から二〇年も名大に身を置いていた飯島学長の言葉だけに重みがあります。

飯島学長時代の名大の動向として注目されるのは、外国人留学生の数が劇的に増えたことです。それまでは、緩やかに増加する程度だったのが、ようやく七九年から増加率が上がりはじめ、飯島学長在任の八一年から八六年にかけて、三倍近くの三二四人に増加しました。その間、国際交流会館（インターナショナルレジデンス）の開設や留学生向けのコースや専攻の設置、名古屋大学の教職員による名古屋大学留学生後援会の発足など、留学生の受け入れを促進するさまざまな取り組みがおこなわれました。現在、名古屋大学では、大学院を中心に世界七〇数ヵ国から一二〇〇人をこえる留学生が学んでいますが、これは学生総数の七％強というきわめて高い数字であり、大学の大きな特徴の一つになっています。

また、「名古屋大学平和憲章」が、紆余曲折をへながらも何とか一九八七年の制定にこぎつけられた背景には、平和運動家としても高名を得ていた飯島学長の存在が大きく作用していたことはまちがいないところです。その飯島学長が就任の辞に記し、平和憲章にも使われている、名古屋大学の学風を示す「自由闊達（かったつ）」という言葉は、二〇〇九年に「名古屋大学学術憲章」にも盛り込まれました。

退任後は、一九九一（平成三）年から愛知県芸術文化センターの初代総長を務め、九六年には勲一等瑞宝章を受けています。二〇〇四年の逝去後、その蔵書など約五千点が、ご遺族から名古屋大学附属図書館に寄贈されました。

第九代学長

早川　幸男（はやかわ　さちお、任一九八七～九二）

第九代学長の早川幸男（一九二三―一九九二）は、一九二三（大正一二）年、現在の愛媛県新居浜市に生まれました。四二（昭和一七）年に私立武蔵高等学校（東京）を卒業し、東京帝国大学理学部に入学しました。卒業後、中央気象台技官をへて、四九年には大阪市立大学理工学部講師、翌年助教授となりました。そして、京都大学基礎物理学研究所教授をへて、五九年には名古屋大学理学部物理学科教授に就任します。担当は、新設された原子核理論講座でした。

名大理学部の物理といえば、二〇〇八（平成二〇）年に二人の卒業生がノーベル物理学賞を受けたことで、あらためて社会の注目が集まっていることはご存じかと思います。

早川の学術業績は多岐にわたり、素粒子、原子核、宇宙線、プラズマなどの広範な物理学の分野で多大な業績を上げるとともに、これらの研究を基礎にした新しい宇宙物理学の発展に大きな足跡を残しました。ま

た、宇宙からの観測の重要性を予見し、自ら実験グループを率いて、日本初の宇宙X線のロケット観測に成功しました。その後も、宇宙観測の分野を切り開き、いわゆる宇宙天文学の創始の中心となりました。八六年には紫綬褒章、九一年には日本学士院賞を受けています。

理学部長を務めたのち、一九八七（昭和六二）年七月に就任した早川学長は、先端技術共同研究センター（現在のエコトピア科学研究所先端技術共同研究施設）、太陽地球環境研究所、年代測定資料研究センター（現在の年代測定総合研究センター）の附置などに尽力しました。とりわけ九一年に大学院国際開発研究科を新設したことは特筆されます。また八九年には、設置以来三〇年の歴史を持つプラズマ研究所が発展的に解消し、文部省核融合科学研究所（現在は大学共同利用機関法人、岐阜県土岐市所在）となったことも大きな出来事でした。

早川学長は、就任時の文章で、創立二〇年目に赴任した時には若い大学として活力に満ちていた名古屋大学が、大学の膨張にともなって学部・学科間の壁が高くなり、質の低下が起こったと指摘し、この傾向をどう受けとめ、五〇年の歴史を次にどう生かすかが課題であると述べています。これは、この時期の大学に共通の大きな問題でした。

八九年、創立五〇周年記念式典が挙行され、記念事業の一つとして名古屋大学シンポジオンの建設がはじまりました。しかし早川学長は、その落成直前の九二年二月、病気のため他界しました。翌三月には、豊田講堂において大学葬がおこなわれています。

第一〇代総長

加藤　延夫（かとう　のぶお、任一九九二～九八）

第一〇代総長の加藤延夫（一九三〇―）は、一九三〇（昭和五）年、愛知県名古屋市に生まれました。四二年に愛知県立明倫中学校（現在の県立明和高等学校）に入学しますが、四五年に陸軍航空士官学校を受験し、その入学直前に敗戦をむかえました。その後、第八高等学校をへて、五四年に名古屋大学医学部を卒業しました。旧制最後の卒業生でした。大学院に残って研究を続け、五九年に医学研究科を修了、医学部助手となり、六三年には講師になりました。

愛知学院大学歯学部微生物講座助教授に就任したのち、六七年から六八年にかけて、フンボルト財団の奨学生として西ドイツのギーセン大学で研究しました。同大学から正規のスタッフとなるよう依頼され、その手続きをしていると、母校から細菌学担当の要請があり、迷ったすえに帰国します。しかし帰国してみると、名大医学部は紛争のただなかにあり、正式に医学部細

菌学講座の助教授に任命されるまで二年を要するという状態でした。七三年に教授に就任しています。九三年に日本細菌学会総会会長、九五年に日本医学会総会副会頭を務めました。

医学部の紛争からの正常化のため積極的に発言・行動していた加藤は、一九七六年には名大史上最年少の四六歳で医学部長に選任されました。加藤は、岳父にあたる加藤鐐五郎（戦前・戦後に衆議院議員を三〇年務めた政治家、本書第一部の田村春吉の項を参照）から、政治や事業には手を出さず、研究者として生きるようにと言われ、本人もそのように考えていました。しかし、誰かがやらなければならない仕事であると考え、大学の運営にも深く関わる人生を選んだといいます。医学部長を三期通算六年（七六～七八年、八一～八五年）務め、鶴舞・大幸地区の機構と施設の充実を実現しました。『名古屋大学五十年史』の編さんにも熱心に取り組み、九〇年から九二年にかけて名古屋大学史編集委員会委員長を務めています。

そして一九九二（平成四）年四月、早川幸男学長の逝去により業務を代行していた松尾稔学長事務取扱の後をうけ、総長に就任しました。なおこの時から、名大では再び「総長」が公式な名称として復活することになりました。

総長としての六年間の事績としては、一九九一年の大学設置基準改訂を背景とする、大規模な組織改革を第一に挙げなければなりません。とりわけ九三年の教養部廃止（情報文化学部の設置）に象徴される四年一貫教育体制への完全な移行と、理学部（九六年）と工学部（九七

年）のいわゆる大学院重点化の完了がその最たるものといえるでしょう。その他の学部でも大幅な改組がおこなわれ、次の松尾総長の時代に入ってまもなく全学的な大学院重点化が完了します。さらに、独立大学院として人間情報学研究科（一九九二）年と多元数理科学研究科（九五年）が、また医療技術短期大学部の四年制への発展として医学部保健学科（九七年）が創設されました。そのほかにも、多くのセンターや施設の附置や統廃合がおこなわれました。

施設面では、深刻になっていた狭隘化・老朽化を解決するべく、一九九三年を「名古屋大学施設再開発元年」にすると大学内外に宣言し、その後実際に各キャンパスの施設整備がめざましく進みました。ごく一部にすぎませんが、工学研究科一号館、国際開発研究科棟、ベンチャービジネスラボラトリー、医学部附属病院の新病棟、人間情報学研究科（現在は情報科学研究科）棟、理一号館（多元数理科学研究科棟）、などを挙げることができます。

また、大学をめぐる新しい動きを適確に伝達し、名大構成員の意思疎通をはかることを目的として、一九九三年に『名大トピックス』が創刊されました。事務的な色彩の強かった『名古屋大学学報』とは異なり、名大の主な出来事や話題を、写真などを多く掲載しながら提供する広報誌です。紙面のリニューアルをへて、オールカラーの月刊誌として現在に至っています。

任期満了による総長退任後は、愛知芸術文化センター総長、愛知医科大学学長・理事長を歴任しました。二〇〇九年三月現在、愛知医科大学理事長として在任しています。

第一一代総長

松尾　稔（まつお　みのる、任一九九八～二〇〇四）

第一一代総長の松尾稔（一九三六―）は、一九三六（昭和一一）年、京都府で生まれました。京都大学工学部土木学科を卒業、六二年に同大学院工学研究科を修了と同時に同大学助手となり、講師、助教授をへて、七二年に名古屋大学工学部助教授に就任しました。七八年には教授となり、工学部長、理工科学総合研究センター（二〇〇四年にエコトピア科学研究機構へ統合）長などを歴任したのち、一九九八（平成一〇）年四月、総長に就任しました。日本工学アカデミー理事、土木学会会長など歴任し、二〇〇三年には土木学会功績賞をうけています。

松尾総長は就任にあたって、現在が学術のあり方の歴史的なパラダイム転換期であるとし、「先端性と調和」を同時に追求するためにも、本当の意味での総合大学として、文系・理系の連携・協力が必要であると述べ、政府の行財政改革によって大学改革・定員削

減・法人化が求められるなか、大学運営に乗り出しました。

組織面では、加藤総長時代にはじまった大学院重点化が文系にもおよび、二〇〇〇年度には全ての研究科で完了することになりました。また〇三年度には、大学院環境学研究科が新設されました。任期の後半には、全国の大学に先駆けた、部局を超えた研究専念組織である高等研究院など、多くの研究センターや学内附置施設の新設がおこなわれました。施設面では、ＩＢ電子情報館、医学部校舎一号館、文系総合館、学生寮国際嚶鳴館、環境総合館、高等総合研究館などが竣工しています。また、老朽化した各校舎の耐震および全面改修工事も進み、次の平野総長の時代においてほぼ完了することになりました。

そして二〇〇〇年には、二年間の全学的な検討をうけて、大学の基本理念と長期的な目標を掲げた「名古屋大学学術憲章」を、全国に先駆けて制定しました。同時に、数年を見すえた中期目標ともいえるものとして、「名古屋大学アカデミックプラン」を策定しました。また、〇二年には全学同窓会が設立され、豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長が初代会長に就任しました。

また、名古屋大学の名前を世界にとどろかせた、二〇〇一年の野依良治教授（当時、物質科学国際研究センター長）のノーベル賞受賞も、松尾総長時代のことです。

こうして、国立大学法人化への準備を終え、二〇〇四年三月に任期満了により退任した松尾総長は、二〇〇九年三月現在、財団法人名古屋都市センター理事長を務めています。

第一二代総長（国立大学法人名古屋大学）

平野　眞一（ひらの　しんいち、任二〇〇四～〇九）

第一二代総長の平野眞一（一九四二―）は、一九四二（昭和一七）年、現在の愛知県知多郡美浜町に生まれました。六五年に名古屋大学工学部応用化学科を卒業、七〇年に大学院工学研究科博士課程を修了すると同時に東京工業大学工業材料研究所の助手となり、アメリカのペンシルバニア州立大学博士研究員をへて、七六年に助教授に就任します。そして七八年には、名古屋大学工学部助教授となりました。八三年に教授、その後は高温エネルギー変換研究センター長、先端技術共同研究センター長、工学研究科長を歴任しました。専門はセラミックスで、この分野における各種受賞をへたのち、二〇〇六（平成一八）年にはアメリカセラミック学会の最高栄誉賞を最年少で受賞しました。国際セラミック連盟や日本セラミックス協会などの会長も歴任しており、セラミックス研究の世界的権威といえます。

そして二〇〇四年四月、名大が国立大学法人として再出発すると同時に、平野総長が誕生しました。法人化後は、総長と七名の理事からなる役員会が大きな経営責任を追うことになり、総長の果たす役割もこれまで以上に大きくなりました。ただ平野総長は、大学運営の基本を「組織主義」に置き、大学構成員からの多様な声を聴いて、その総合力としての活性化が最大限にはかられるように調整し導くことが、総長に求められるリーダーシップであると述べています。

平野総長は、国からの運営費交付金の削減など、大学運営がますます厳しくなっているなかで、名古屋大学学術憲章がうたう「優れた研究の創造と将来を担う豊かな人間性を持つ勇気ある知識人の育成を通して社会に貢献する」という本学の使命は不変であるとの信念の下、様々な事業に取り組みました。主なものを見ていきたいと思います。

研究組織の面では、二〇〇四年度に既存のセンターや施設を再編・統合して発足したエコトピア科学研究機構を、〇六年度から大学附置研究所としてのエコトピア科学研究所に発展させたことが挙げられます。「豊かで美しい持続可能な社会（エコトピア）の実現」というその理念は、現代社会における普遍性を持つものであると同時に、名古屋大学学術憲章が「人間性と科学の調和的発展」として掲げるものでもあります。また、国際的な観点から教育・研究活動に関するアドバイスを受ける組織として、七名の世界的な研究者からなるインターナショナルアドバイザリーボードを設置しました。そして名古屋大学は、薬学部や薬学系研究科を持たな

い唯一の旧帝国大学ですが、この年来の課題を解決するため、地域の私立大学薬学部などとの共同による「共同大学院創薬科学研究科」構想を立ち上げ、創設に向けての準備を進めました。

運営組織では、諸問題や諸施策を統括・立案・実行していくため、国際交流協力推進本部、情報連携統括本部、環境安全衛生推進本部、総合企画室、広報室などの運営支援組織を整備しました。施設面では、二〇〇四年に名大史上八人目の文化功労者に選ばれた赤﨑勇特別教授の業績を記念する赤﨑記念館の新築のほか、〇八年二月には、トヨタ自動車株式会社およびトヨタグループ各社の寄付により、豊田講堂の改修・増築が竣工しました。

また、法人化後の国立大学では、地域の企業・団体・個人や同窓生との連携を深め、支援を得ていくことの重要性が、より高まったといえます。その一環として、二〇〇五年一〇月に初めて開催したホームカミングデイは、同窓生のみならず、地域住民や学生の家族などにも広く門戸を開いており、昨年までに四回を数えて、本学の重要な行事として定着しつつあります。また、創立七〇周年記念事業の一つとして、〇六年に名古屋大学基金を創設しました。

そして、平野総長時代のビッグニュースは、何といっても二〇〇八年、益川敏英博士と小林誠博士にノーベル物理学賞、下村脩博士に同化学賞が授与されたことです。受賞の対象となった研究は、いずれも名古屋大学時代にその基礎がなったものであり、名古屋大学が日本のみならず世界中から注目されたことは記憶に新しいところです。

第一三代総長（候補者）

浜口道成（はまぐち　みちなり、任二〇〇九～）

そして二〇〇八（平成二〇）年一〇月、第一三代総長候補者として浜口道成教授（大学院医学系研究科長）が選出され、二〇〇九年四月一日に就任します。

浜口道成第一三代総長候補者は、一九五一（昭和二六）年、三重県に生まれました。七五年に名古屋大学医学部を卒業後、大学院に進学し、八〇年には医学博士の学位を取得しました。同年、名古屋大学医学部附属癌研究施設の助手、四年後には病態制御研究施設の助教授となりました。その後、ロックフェラー大学分子腫瘍学講座研究員として、アメリカでの三年間の研究生活をへて、九三年には教授に就任しました。病態制御研究施設長、大学院医学系研究科副研究科長を歴任したのち、二〇〇五年から同研究科長に就任、現在に至っています。平野総長に続く名大生え抜きであり、初の戦後生まれの総長でもあります。研究者としては、常に癌研究の

最先端に身を置き、とくに癌の遺伝子治療の研究において大きな業績を上げてきました。学会では、日本生化学会、日本ウイルス学会、日本癌学会でいずれも評議員を務めています。

浜口総長候補者は、昨年一〇月の選出決定後の記者会見や、『名大トピックス』二〇〇九年一月号に掲載された平野総長との年頭対談などにおいて、新総長としての抱負を述べています。それらによると、浜口総長候補者は、「人材の育成」を大学運営の軸にすえようとしていることが分かります。その人材とは、日本の未来を切り開く人材であり、中部地区の中核となる人材です。年頭対談では、次のようにも語っています。

「名古屋大学というのは、よく新入生の出身地が中部地区に偏っていると言われますが、私はそれで良いと思います。入る時はドメスティックに、出る時はインターナショナルにというのが、大学が果たすべき役割だと思います。アメリカのグローバリゼーションというものに綻びが見えている今、やはり土着文化とも言うべきものをしっかりと心の中に持って、インターナショナルに活動できる人材を育てなければなりません。」

地域性と国際性の融合、でしょうか。そうした人材育成のためには、国際的通用性、精神的・社会的な自立、複眼的な視点という3点が必要であり、海外での研修などで学生に自己変革をとげる機会を積極的に提供するとともに、日本の文化を理解すること、異なる分野間の連携研究を進めることが重要であると説いています。四月からの大学運営が注目されるところです。